安全で安心な図書館を目指して
-KKAA-WGの取り組み-

五十嵐由美子（いがらしゆみこ）
（理工学メディアセンター主任）

1　はじめに

未曾有の被害をもたらした2011年３月11日の東日本大震災では，理工学メディアセンター（以下「当センター」とする）も被害を受けた。ガラス窓の破損，壁のひび割れ，落下した資料，帰宅困難な状況やその後の施設修復の記録などが写真とともに詳細に残されている。被災直後は記録を残すことや災害への備えに余念がなかったが，大きな地震のない日々が続くことで災害への危機管理意識は徐々に薄れてくるように感じた。

また，自然災害はもとより，怪我人の発生，盗難被害，利用者からのクレームなど，図書館では様々な事態が発生する。クレームに至らないまでも利用者からの要望は寄せられている。しかし，館内の安全管理について，図書館スタッフ（以下「スタッフ」とする）の意識の低さが懸念された。

そこで，当センターでは，2016年６月に「館内環境・安心・安全ワーキンググループ」（以下「KKAA-WG」とする）を立ち上げ，様々な角度から館内を点検し，問題点の改善とスタッフの危機管理意識の向上を目的とした。活動内容は，利用者環境の美化・整備，危機を未然に防ぐための対応に加え，災害時の利用者避難誘導に特化した防災マニュアルの整備と訓練の実施であった。

本稿では，KKAA-WGの活動について紹介するとともに，館内環境や危機管理への意識がどう変わったかを述べる。

2　主な問題点への対応

KKAA-WGは2016年６月から2017年３月末までの10か月間限定で，４名のメンバーが活動に携わった。危機管理，館内環境，緊急時対応などの大項目を立てて分類した検討項目リストを作成し，改善策の検討とそれに基づく対応を行った。以下に対応事例の一部を紹介する。

(1)　危機管理～防犯対策～

大学図書館は利用者の大半が学内者であるため，安全な場所と思われがちである。しかし，件数は少ないが，ごく一部の問題利用者が引き起こす事案や盗難被害の事例はある。入館者の中に危険な人物が紛れていないとは限らないことを念頭に置き，例えば，ハサミやカッターなどはカウンター内であっても利用者のすぐ手の届く位置に置かないことや，昼休みなどで事務室が無人の時は，その都度，通用口を施錠するなどのルールを決めてスタッフの危機意識を高める注意喚起を行った[1)]。

また，見通しの悪い閲覧席エリアが２か所あることがわかったため，2017年度の予算措置を講じ，防犯カメラを２台増設した。

(2)　館内環境～施設への対策～

当センターは，本館（1971年建築）の１階フロアを中心に創想館（2000年建築），別館（1989年建築）が連絡通路で繋がっている。本館と創想館の連絡通路は一旦建物の外に出るため，屋外用の金属製マットが敷かれていて，ブックトラックが通過する度に騒音が館内に響いていた。この騒音については以前から利用者からの苦情も挙がっていたが，建物の構造上，対応は不可能だとあきらめていた。今回，キャンパスの施設担当者に相談した結果，汚れやすくなるがカーペット敷設も可能であることがわかり，金属製マットをカーペットに取り替え騒音を解消した（図１）。

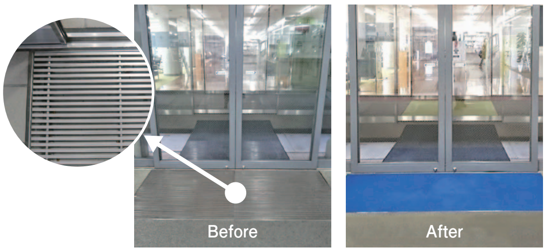

図１　本館と創想館の連絡通路

建築時にOAフロアではなかった本館は，二重床への変更によって，館内通路に2か所の段差スロープがあり，利用者がつまずくのを目の当たりにすることもあった。床全体がグレーだった通路の段差スロープ部分をピンクと濃紺のタイルカーペットに変えたことによって，遠くからでも段差が目につくようになった（図2）。

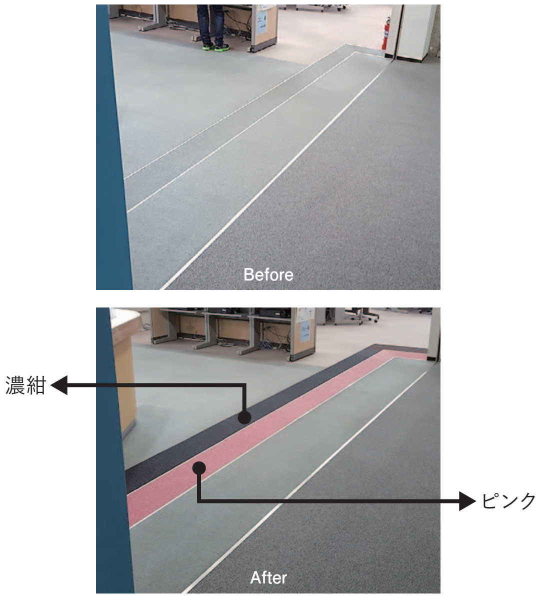

図2　本館通路の段差スロープ

(3)　緊急時対応

a　避難経路の点検

館内の非常口へ向かう避難経路をすべて確認したところ，いくつかの問題が発覚した。別館通路の奥に館外に出る非常口があり，その通路脇のスペースに書架の柱や棚板などが積みあがっていた。別館は最も利用者の少ないエリアということもあって，一時的に置いたものが長期間放置されたままになっていた。これらが地震によって崩れた場合，避難経路を塞ぐ恐れがあったため，不要なものを処分し撤去した（図3）。

図3　別館非常口通路

また，利用者スペースから非常口へ向かう避難経路のひとつに，事務室の扉を通り抜ける経路があり，通常は防犯のため事務室内から施錠していた。しかし，非常口への案内板がある扉にも関わらず，利用者スペースから開錠できる仕組みがなかった。これでは非常口への経路が絶たれるため，カバーを壊して開錠できるサムターン錠に変更した（図4）。

他にも，この点検作業によって改善された点として，非常口誘導標識を蓄光式に交換したことや，緊急放送が聞こえにくいエリアへのスピーカー増設を挙げておく。

図4　非常用カバー付きサムターン錠

b　防災マニュアルの改訂と避難誘導訓練

当センターでは，東日本大震災の経験を踏まえ2012年に作成した地震発生時の対応マニュアルに改訂を重ねて来た[2)]。そのマニュアルに則った行動ができるかを確認するため，2017年2月22日にスタッフによる避難誘導訓練を実施した。震度5を超える地震を想定したマニュアル（図5）に従って各自の担当エリアに向かい，利用者を模擬誘導しながら集合場所に戻って報告をするという簡単な訓練ではあったが，実際にスタッフ全員で手分けをすると，5分程度で館内を見回れることが確認できた。訓練終了後は，館内の避難経路をスタッフ全員で巡回し（図6），避難用具の使い方やAEDの配置場所を確認した。その後も年1回の訓練時に気づいた点を各自で防災マニュアルに追加し，改訂を継続している。

また，学内で行われるBLS（心肺停止状態の人に対して行う救命処置）講習にはスタッフ全員が必ず

一度以上は参加することにしている。

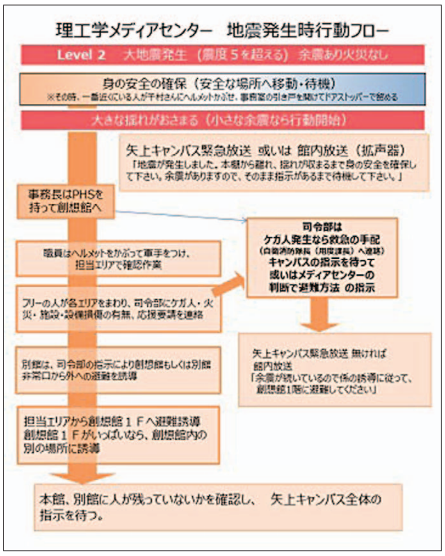

図５　震度５を超える地震を想定したマニュアル

図６　避難経路巡回の様子

３　活動を終えて

今後も対応が必要，或いは未着手の案件について，管理・検討を継続する担当スタッフを検討項目ごとに定め，KKAA-WGの活動を終了した。この活動では，「今まで大丈夫だったから」「費用がかかるから」とつい後回しにしがちな問題点もすべてリスト化し，すぐに改善が可能な案件を優先して行った。外注工事が必要な案件は，KKAA-WG活動中に次年度に行う方針を決定して工事申請や予算措置を行い，短期集中で対応したことが成果に繋がった。

また，この活動によって，スタッフ全員が問題点を共有し，日頃から館内環境に目を向けることがいかに大切であるかを認識することができた。

小さな落書きだからと見逃していると，管理が行き届いていないと思われ，悪質な施設汚損にエスカレートする可能性がある[1]。通路の不用意な物品放置は幅員を狭め，災害時には避難の支障となるだろう。快適で安全な館内環境を保つには，普段から館内を巡回し，施設の不具合や美観を損ねるものを見つけたらそのままにしないことから始まるのではないだろうか。巡回は，ルール違反や盗難などの抑止にも効果をもたらすことから，危機を未然に防ぐことを重視して，今後も管理の行き届いた図書館を目指していきたい。

参考文献

1）日本図書館協会．みんなで考えるこんなときどうするの？：図書館における危機安全管理マニュアル作成の手引き．東京，日本図書館協会，2014，244p.

2）日本図書館協会．みんなで考える図書館の地震対策：減災へつなぐ．東京，日本図書館協会，2012，127p.